

赤木桁平

「道草」を読む

「道草」を読む

「道草」の読者は、まずあの紛糾錯綜した四囲の關係を、よくもあれほど手に執るようにはつきりと写し出したものだと思う。それは絵画の初心者にしばしば見出みいだすような、いわゆる一点一画を根氣よく敷写しきうつしにする底の、不手際ふてぎわを極きわめた写生ではない。取材には適宜の選択と省略とが行われ、恰好かっこうの取捨と拮據くんせきとが行われている。その技巧にはちよつとした徳田秋声氏を思わすような味わいがある。

健三と細君、健三と島田、健三と比田夫婦、それ等の関係は皆遺憾なく描けている。ただ一つ、謙三と妻君の父親との心的交渉が、読者の頭にびったりと触れてこない。——薄膜を透して物象を観るみような不満がある。

これ等の多くの関係のうちで、最も色濃く描かれているのは、もちろん謙三と細君の夫婦関係である。

謙三も愛に渴している。細君も愛に渴している。そしてその両者のいずれにも愛せんとする意思は十分に働いてはいるが、極端に自意識の強い二人の性格と、謙三の

特殊な個性に基く細君の夫に対する無理解とが、あくまでこの二人の精神的抱合を反発して、そこにはほとんど間断なき愛の鬭争を醸成する。——作者の覗った境地は、十分意味ある問題を含んでいる。

かく愛と悪にくしみとの感情が相交錯して、日常生活の果てしない円輪の上をぐるぐる回ってゆくように、二人の運命も、また二本の並行曲線となつて、相寄り、相離れ、永遠に交ることを知らない生命の歩みを続けてゆく。「道草」の作者は、まずこの矛盾と撞着どうちやくとの悶着もんちやくから、どうしてもその解決点を見出すことのできない、「性格」

の悲哀を描いている。

健三は淋さびしい。健三には絶えず理解を求め、心がある。この欲求を自己の外界から満足することのできない償いとして、彼はさらに自分の細君から二重の理解を得ようとする思念を抱いている。しかし、それがとうてい空望にすぎないと自覚するところに、彼のやるせない淋しさがある。彼の落付おちつかない焦慮がある。

けれども健三は、自分が細君を理解することによって、逆に細君の自分に対する理解を呼び起すだけの愛を持た

ない。いな、愛を持たないというよりも、むしろ愛を
 じて力とするだけの情熱をもちあわ持合していない。

しかも奇なる運命はこのあらゆる精神上の罅隙かげきをほてん補填
 して、この二人の関係をどこまでも無解決に引摺ひきずってゆ
 く。そこに運命に抵抗するを知らないリアリストの悲哀
 がある。——「道草」の作者は、第二にこの「運命」の
 悲哀を描いている。

さらに健三は、自己の周圍に、策略と技巧とで固めら
 れた世界を見出す。それ等の世界は、ややもすると不法

に彼を侵害しようとする。

自分に対して案外強い彼は、外界に対して案外弱い彼である。この弱い彼と、この強い彼とが、心の裡うちで親しく面と面とを突合つきあす時に烈はげしい苦悶くもんが起る。もとより彼は自分と外界とを調停して、そこになんらかの妥協点を見出すほど器用な男ではない。彼は外界に対して弱いくせに、その弱さを全然外界そのものの罪に仮託して、これを自分に対する強さへの弁解とする。

けれども彼は絶えず反省から反省へと逆行する。彼にはすべての自己を解放して、放埒ほうらつにこれを情意の野に遊

ばせるだけの余裕がない。彼は怯懦きようだである。彼は卑怯ひきようである。——彼はただ自分の内界のみを凝視する。そしてその自己の内界に投げられた瞳ひとみを返して、これを外界に移すとき、彼はその瞳からいつも冷笑と侮蔑ぶべつと憤怒とを注ぎながら、自衛的にこれと覷面てきめんする。彼の懸命けんめいな努力は消極的に自己を護まもるところにあつて、積極的に何物かを築くところにはない。

——こういう性格と、こういう性格に培つちかわれた生き方とが、「道草」の作者によつて、どう扱われるかということにこの一遍の骨子がある。

健三と細君との関係には、性格とサイコロジ―とが微細に現われている。健三と外界との関係には性格はあつても、サイコロジ―が乏しい。それだけ前者の関係を写した作者の筆には、事実を操縦^{あやつ}る靈活な「いのち」が滲^{にじ}んでいる。

読者の頭に映る健三と外界との関係は、作者自身の委曲を尽くした説明はありながら、どうも金さえあれば解決の付きそうな気持ちがある。少くとも金さえあれば、その関係はきわめて淡いものになるに相違ない。――だ

からこういふことがいえよう。健三と外界との関係においてには、たまたま健三の性格が「いかに」動くか、健三の個性が「いかに」その特色を發揮するかという明白な反証は^{あが}挙つても、それ以上に、人間の個性を司配する強い「力」は現われぬ。性格は概念的に、模型的になりやすいが、サイコロジ―は事実である。サイコロジ―に突^{つっこ}込んで、人間が初めて生きてくる。

だから健三と細君との交渉には、常に性格の「必然」とサイコロジ―の「必然」とが伴うている。その「必然」に従う二人の運命を眼前に見ながら、読者は「これは仕^{しか}方^{かた}」

がない」と独言する。そこに健三と細君との変な夫婦関係を描こうとした作者の成功がある。

しかし健三と外界との交渉はどうだろう。読者はその時にもなお「これは仕方がない」と独言するだろうか。もしくはその独語に代えて、健三に対するなんらかの非難を浴びせかけはしないだろうか。さらに健三の外界に対する態度に、なんらかの「必然」を求めはしないだろうか。

一読者としての経験からいうと、健三と細君との交渉を読んでゆくときは、なんとなく誘われるような気持ち

になる。反対に、健三と外界とのいきさつを讀んでゆく時は、なんとなくいやなような気持ちになる。

もちろん、前者は後者と違って根底に愛がある。しかしそればかりではない。

如上の見方からして「道草」の興味の焦点は、やはり性格描写という点にある。主人公の健三はもとより、その細君にしても、島田にしても、比田にしても、それ等の性格が皆目に見えるように描かれている。

「道草」の中心人物はもちろん健三である。健三と言う

人格を枢軸として、その周囲に渦巻く^{うずま}人的関係を、仔細^{しさい}に、かつ丹念に、描き上げたものが「道草」である。

その人的関係は、性格と性格との交渉を主とするところに意味がある。たとえ運命はあっても、運命は性格の色をより濃くすることによって、むしろ反襯的^{はんしん}効果を齎^{もたら}している。

「道草」には事件や事実があまり描かれていない。けれども健三と細君、健三と島田との応対などは、その場面^{シーン}がいつも劇的興味を湛えて読者に迫ってくる。

なかんずく「道草」の作者は、過去を語ることに卓越たぎりょう技倆を持つている。この過去を語るることによって、作者は筋の発展に対する技巧上の欠陥を補い、かねて、ややもすると単調に流れようとするその構想に、一味の豊かな低徊ていかい的興趣を加えている。

最もうまいと思うのは、主人公が少年時代の回想である。自然および人事に対する種々雑多な記憶が、淡々しい中にきわめて印象的な確實さをも持って描かれている。それを読んでいると、なにゆえとは知らず、読者の胸に夢幻的な哀感がひいひいとこみ上げてくる。そして

作者は詩人だなど思わせられる。

例によって作品の底に漲るモーラルトーンみなぎ(は強い)。けれども「行人」や「心」に見るほど、露骨にはそれが現われていない。

「道草」が示唆する作者の思想には、一種の個人主義がある。しかも作者は、むしろその個人主義の逢会すべき悲劇を描いて、その個人主義の発展すべき心証を語っていない。その偶然な結果が、計らずもその作品の有するリアリズムを強調している。

「道草」の文章については、いまさらかれこれいう必要もあるまい。年を趁おうて平淡蒼古そうこの色を加えてゆく作者の文章は、「道草」においても、ますます、その燦銀いぶしぎんのような光沢と、その月光のような陰影とを加えている。

最後に「道草」は、徳田秋声氏の「あらくれ」とともに、本年の創作界を代表する逸品であろうと付記しておく。

(大正四・一〇・一九「読売新聞」)

日本文学電子図書館

「道草」を読む

著 者 赤木桁平
制作者 宮澤一郎
底 本 「漱石全集 第12巻」角川書店
昭和41年4月20日 5版発行

日本文学電子図書館